

今月の谷口雅春先生のお言葉

子供の心に自信力をはぐくもう

子供は鋭敏な感受装置である

諸君は人の聞かざる所に於ても、出来るだけ善き言葉を語り、善き言葉を読まなければならぬのである。い  
わんや鋭敏な感受装置を備えた子供を側らに置きなが  
ら、悪しき言葉で人を譏つたり、猥りがましい話をした  
り、病氣や、死や、悪魔や、恐怖や、その他いやしくも  
この世に実現して善くない物の言葉を語ることが、その  
子供にどんなに悪影響を与えるかは容易に推察が出来る  
であらう。

子供は、かくの如く鋭敏な言葉の感受装置であるがゆ

えに、子供の側で善きことを話すのはまた非常な善き  
効果があるのである。吾々成人の魂の奥底にきざみつ  
けられている深切や、いたわりや、愛や、崇高きもの  
偉大なるものに対する憧憬の大部分は、幼き頃の吾々  
の魂に、表面的には意味がわからぬにせよ、大人から  
発せられた善き言葉の精神波動——特に母の和顔愛語が  
吾々の心に生みつけてくれた精神的影響であるのであ  
る。(中略)

だから、諸君よ、いやしくも何人とも語るならば善  
き言葉を以て語れ。そこには必ず善き実を結ばずにはい

ないのである。

(新編『生命の真相』第22巻154〜155頁)

「必ず出来るようになる」と教えよう

神とか、この世界の創造主つくりぬとかについて子供が説明を

求める場合には「お前に話したって解わかることではない」

と行って子供の問とを一蹴いっしゅうする人があるが、かくの如ごとき

答こたえは子供の能力の自信力を失わしめることになるのでよ

ろしくないのである。語調の強い言葉で、「お前には解

らない！」と断定的に言われるときその言葉は幼き心の

奥底に強く刻きみつけられ、「自分は無能力なものだ」と

いう消極的な確信をもつようになり、この消極的な確信

は子供の生涯まことにつき纏まとうて、彼の生命の伸び伸びとした

生長を不可能にしてしまうのである。子供に対しては常

に「何でもお前には出来ないことはない」と暗示するよ

うにしなければならぬのである。たとい実力以上いま

出来ない事柄でも、「次第に必ず出来るようになる」と

教えなければならぬのである。神のこと、創造主つくりぬのこ

となどは、子供の言葉で出来るだけ平易に説いてやれば

子供は直覚ちよくかくて的にその本質をさとしてしまうものである。

何故なぜなら彼は神みなもとを源うまとして生れた「神の子」であるか

ら最初からその本源を知っているのである。

(新編『生命の真相』第22巻156〜157頁)

劣等感を習慣的な心にはならぬ

子供が神秘しんぴについてたずねるのは、本能が彼にそれを

理解し得ることを内にそれとなく自覚しているからであ

る。それだのに彼がたずねた疑問に対して「お前には解

らないぞ」と一蹴いっしゅうしてしまうならば、折角せつかくえいびん鋭敏に働

うとしてゐる知性の出口が堰せき止められ、伸び出ようと

していた知性は蝸牛かたつむりが触角を引つ込めるように萎縮いしゆく

てしまう。それは、ただ一時じ萎縮するだけではなく、習

慣的に「汝なんじは劣等な知性しか有たないぞ」という信念を

心に持続するようになるかも知れないのである。もし子供の心が習慣的に「自分は劣等なものである」という信念を有ち続けるようになるならば、その「劣等者としての自覚」は次第に現実の上に芽を出して来て、その子供は各種の方面で劣等をあらわすようになるであろう。それ故吾らは子供の心に来るだけ「劣等者としての自覚」をつぎ込まないように、彼らに話す言葉を注意しなければならぬのである。

(新編『生命の真相』第22巻157～158頁)

子供にはどれだけでも生長する力を授かっている

されば諸君よ、子供に対しては最も積極的に「汝は大人<sup>なんじ</sup>の答えることを必ず理解し得る」と断言して差支<sup>さしつか</sup>えないのである。もしどうしても理解し得ない場合でも「だんだんハッキリ解<sup>わか</sup>るようになる」と漸進<sup>ぜんしんてき</sup>的<sup>てき</sup>の進歩の暗示を与えて、彼をして決して決して自己の潜在能力<sup>せんざいのうりよく</sup>に対する確信

を失わしめるようにしてはならないのである。「人は成ろうと思う者には必ずなれるのだ。知ろうと思うて知れない事はあり得ないのだ」と彼らを鞭撻<sup>べんたつ</sup>し、勇気づけ、世界の偉大な学者、発明家、英雄、豪傑<sup>ごうけつ</sup>、聖賢<sup>せいけん</sup>の立志伝<sup>りっしでん</sup>などをやさしい言葉で説いて聞かすようにせよ、子供は偉人の立志伝を喜んで聞くものだ。それらの偉人と同じく汝の内にも磨けば磨く程<sup>ほど</sup>、どれだけでも生長する潜在能力の蔵<sup>かく</sup>されていることを彼に知らしめよ。何事でも出ると思つて突<sup>つ</sup>き進<sup>すす</sup>めば必ず成<sup>な</sup>り遂<sup>す</sup>げ得<sup>え</sup>るだけの力を人間は授かっているものだという真理を、子供に理解力が附<sup>つ</sup>き始めた時、その初期から教え込むようにするが好<sup>よ</sup>いのである。

(新編『生命の真相』第22巻158～159頁)

